子どもの心理

子どもの心理

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=21826953

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, 原作終了後

最終回から２０年以上。
ヒュンケルとマァムは、ネイル村で暮らしています。また、ヒュンケルは、戦後の一時期、カール騎士団に所属していたことがあり、それが前提になっています。
ふたりの子どもたちとその周囲の人々の掌編連作。意外な人とも絡んでいます。
「折り重ねられた時の蓄積」の前年のお話。
最終ページに子どもたちの設定つき。

ヒュンケル（43）マァム（38）
ヒュンマの子どもたち
長男（17）長女（15）次男（10）次女（5）

2024.3.22〜24　ヒュンマおこさまWEBオンリー「okosama」合わせ

子どもの心理

長男（17）の試練
　いつもどおりの夕食時、マァムがキッチンから子どもたちに呼びかけた。
「出来たわよ～。テーブル片付いてる？」
「はーい。」
「あ、取りに行くわね。」
「お願い。」
　上の娘がすぐさま、マァムのもとに向かう。弟は、テーブルの上を片付けながら、末の妹の面倒を見ていた。近頃、こどもたちがよく動くようになったので、ヒュンケルは手持ち無沙汰だ。もちろん、彼が夕食の支度をすることもよくあるのだが、この日はマァムがキッチンに立っていた。
「兄さんがいないから、食事も少なくなったわね。」
　上の娘はわざと憎まれ口を叩くと、マァムが彼女に尋ねた。
「そんなこと言って、淋しいでしょ？」
「全然！」
　上の娘の天邪鬼な物言いに、ヒュンケルは苦笑した。マァムのことばが続く。
「今は、見習いでカールに行っているだけだから、直ぐに帰ってくるかもしれないけどね。」
「おれはそのほうがいいな。兄さんと遊びたいし。」
　母の発言に、今度は、下の男の子が答えた。
　マァムのことばどおり、ヒュンケルとマァムの間に生まれた一番上の男の子は、今はカールにいる。と言っても、今はまだ見習いで、いわば、体験期間としてカールで過ごしているのだ。生まれてからずっと兄とともに過ごしてきた年の離れた弟からすれば、それは寂しいことだろう。
　だが、長男の気質をよく知るヒュンケルからすれば、残念ながら、下の息子の希望は、やや期待できないものであろうと考えていた。

「あいつのことだ。カールでも上手くやっているだろう。
　あいつがカール騎士団に入りたいといったときは驚いたが、それだけ強く思っていたのだろうな。
　心配しなくても、上手くやっているさ。」
「そうね。」
　ヒュンケルの言葉に、マァムも頷いた。
　両親にそう言われると、下の息子は顔を曇らせた。
「・・・兄さん、帰ってこない？」
　ヒュンケルは、自分によく似た銀の髪を軽く撫でると、息子を励ますように、声をかけた。
「見習い期間が終わったら、いったん帰って来る。それに、あいつがカールに移住したとしても、遊びに行けばいい。行けないところではないんだからな。」
「そうだね・・・。」
　父の言葉に、少年は笑みを浮かべた。
「わたしもいくー！」
　末の妹が勢いよく手を上げると、マァムの声が飛んできた。
「はいはい、まずは、今日はご飯を食べましょうね。」
　そうして、夕食を食べ始めると、不意に、玄関の扉がノックされた。
　日が沈んだこの時間に、彼らの家を訪ねる人物に心当たりがなかった。
「いい、マァム、俺が出る。」
　ヒュンケルはさっと立ち上がると、玄関に足を運んだ。そして、幾分かの警戒心を持ちながら、ゆっくりと扉を開けた。
　そのまま、ヒュンケルは手を止めた。
　彼の眼の前には、カールにいるはずの長男が、佇んでいた。普段は明るい彼が、蒼白な面で立ち尽くすようにそこにいる。
「・・・父さん、俺・・・。」
　何があったのか察したヒュンケルは、すぐにリビングを振り返った。
「マァム。」
　その声に、子どもたちも玄関に視線を送る。真っ先に、兄の帰り

を待ち望んでいた次男が、声を上げた。
「えっ、兄さん！？」
　だが、いつもなら、弟の声に笑顔を向けるはずの長男が、なんの反応も見せない。マァムもすぐに異変を感じ取り、腰を浮かせた。ヒュンケルと目が合う。
　ヒュンケルは、落ち着いた声色で、マァムに告げた。
「疲れているようだ。上で休ませる。お前たちは、先に食べていてくれ。」
　マァムはすぐに頷いた。
　ヒュンケルは、玄関に佇んだままの長男の背に手を当てると、彼を家の中に招き入れた。

　つい半月ほど前まで、長男自身が寝起きしていた２階の部屋に彼を通すと、ヒュンケルは、息子をベッドに座らせた。ヒュンケルも、手近な椅子に座り、息子の様子を見つめた。
　普段から明るかった彼の息子は、蒼白な面のまま、うつむいていた。ベッドに座っても、なかなか、言葉を発しようとしない。唇が時々動き、何かを言おうとしているが、すぐにその言葉を飲み込んでいる。そんな気配を感じた。
　そんな様子の息子に、カールで何があったのか、ヒュンケルは察していた。
　ヒュンケルは、低い声で、息子の名を呼んだ。ぴくりと、彼が肩を震わせたのに気付いた。
　ヒュンケルは、更に確認するように尋ねた。
「・・・その様子では、聞いたんだな。」
　何を、とはあえて口にしなかった。息子もまた、何も言わなかった。
　だが、しばしの沈黙の後、息子は、父に尋ねた。
「・・・父さん、本当なの・・・？」
　やはり、何が、とは言わなかった。だが、息子の言わんとすることは、ヒュンケルには痛いほどわかっていた。
　ヒュンケルは、静かにうなずいた。
「ああ・・・本当だ。」

そして、彼は息子が避けているであろう言葉を口にした。
「お前の聞いたとおりだ。
　俺は、魔王軍の不死騎団長だった。
　パプニカを滅ぼし、先王の命を奪ったのは、俺だ。」
「そんな・・・そんなはずがないだろう！？
　だって、父さんは、アバンの使徒じゃないか！先生の一番弟子だろう！？
　魔王軍のはずがない・・・嘘なんでしょう？父さんのことを悪く言うやつが流した噂なんじゃないのか？」
　父の言葉に、彼はむきになって反論した。泣き出しそうな悲痛な叫びは、残酷な事実の否定だけを望んでいた。
　ヒュンケルは、息子の叫びを受け止めながら、淡々と語り始めた。
「確かに俺は、アバン先生の最初の弟子だ。だが、俺は、先生の元を離れ、長く魔王軍に身を置いた。俺は、あの戦いのときには、アバンの使徒として戦った期間よりも、むしろ、魔王軍として戦った期間の方が長いくらいだ。魔王軍の戦士として、命を落としていてもおかしくはなかった。」
　息子が、呆然としたまま、自分を見つめていることをヒュンケルは感じていた。ヒュンケルは、極力事実のみを淡々と述べていたが、それでも、息子のショックは計り知れないものがあることは、容易に理解できた。せめて、彼を安心させるように、ヒュンケルは言葉を添えた。
「もちろん、俺が大魔王との戦いで、アバンの使徒として戦ったのも事実だ。
　どちらも、間違っていない。」
　長男は、うつむくと、押し黙った。本来なら両立しないはずのふたつの立場がいずれも誤っていないという父のその説明が、いっそう、真実味を持っていた。
　ヒュンケルは、声を落とすと、わずかに話題を変えた。そこには、父親としての苦悩が滲み出ていた。
「お前がカールで騎士団に入りたいと言ったときに、この話をしておくべきか、マァムと話し合った。お前にも話したことがある通

り、俺もカール騎士団に所属していた時期がある。あそこには、俺のことを知っている者もまだいるからな。いずれ、この話がお前の耳にも入るだろうと思ってはいた。
　だから、お前が見習い期間を終えて、正式にカール騎士団に入ることを決めたのなら、そのときにはこの話をしようと思っていた。
　しかし、思ったよりも早くお前がこの話を聞いてしまったのだな。
　驚いただろう。
　・・・すまなかった。」
　父の詫びを耳にし、だが、息子は何もいえなかった。押し黙ったまま、言葉を継げずにうつむいていた。
　父もまた、視線を落としたまま、沈黙を維持していた。覚悟を決めたようなその面は、我が子からの非難を受け止める意思があった。
　やがて、しばしの沈黙の後、息子はゆっくりと口を開いた。
「・・・本当なんだ・・・。」
「ああ。」
「母さんも・・・知っているんだ。」
「知っているどころか、俺がマァムに出会ったときには、俺は魔王軍にいた。」
「えっ？」
「俺はマァムとは、子どもの頃にも会っていたが、記憶には残っていなかった。成人してから、初めてマァムと出会ったのは、俺が滅ぼしたパプニカでだった。」
　ヒュンケルはそう言うと、懐かしむような眼差しで、ぽつりと呟いた。
「俺を救ってくれたのは、マァムだった。マァムがいたから、俺はアバンの使徒として戦って来られた。俺が今、こうして生きていられるのも、すべて、マァムのおかげだ。」
　その言葉の裏に、青年は、父の母に対する掛け値のない信頼と感謝、そして、深い愛情を感じ取った。
「先生とも話をしていた。
　俺の過去のために、お前がカールで難しい立場に置かれないか、

心配していた。今でも、俺に恨みを感じている者は、多くいるだろう。
　幸い、お前は、顔立ちは俺に似ているが、髪の色は、マァム譲りだ。お前を見て、カールを２０年近く前に離れた俺を思い出す者が、そうそういるとは思えなかった。それが、救いだった。」
　ここまで聞いて、青年は、カールに向かう前に父に言いつけられたことの本当の意味にようやく気付いた。
　父からは、素性を隠すように言われていた。王配アバンにも、同様に言われた。それは、アバンの使徒を両親に持ち、幼い頃からアバンとも接してきた彼が、特別扱いされないようにするための配慮なのだと、彼は思っていた。
　だが、それだけではなかったのだ。
　彼が、元不死騎団長の息子であると知られないようにするための、防御壁だったのだ。
　ヒュンケルは、息子に、その推測を確信させる言葉を口にした。
「俺の子であるがために、お前は、いわれなき差別や非難をうけるかもしれない。
　俺の存在が、お前のこの先の道に支障になるようであれば、遠慮はいらない。
　俺を捨ててくれ。
　先生がお前の相談に乗ってくれる。お前の素性を隠すことは可能だ。」
　父の言葉に、息子の頬がさっと紅潮した。怒りをみなぎらせ、荒げた声を父に投げつけた。
「馬鹿なこと言わないでくれよ！俺は父さんの子だ！何があったって、変わるはずないだろう！？」
　悔しげに唇を噛む彼の目には、うっすらと涙が浮かんでいた。
ヒュンケルは、息子に詫びた。
「・・・すまない。」
「びっくりしたよ。嘘だって思いたかった。
　でも・・・それでも、カールで聞いたのは、父さんは、魔王軍にいたから苦労してたっていう話だった。同情的な声のほうが多かったよ。パプニカには俺は行ってないからわからないけど。でも、

カールで、俺の前で、近衛師団元副師団長ヒュンケルを悪く言う人はいなかった。俺が父さんの息子だって、知らせてなかったのに。
　だから、余計・・・信じたくなかったんだ。」
　しかし、彼は、真っ直ぐにヒュンケルを見つめると、はっきりとした口調で父に依頼した。そこにはもう、迷いはなかった。
「ちゃんと聞かせてくれないか、父さん。俺、もう十分わかる年だから。」
　ヒュンケルは、驚きの混じった目で、息子を見つめた。そこには、幼さはなく、はっきりとした意思が見て散れた。
　ヒュンケルは、承諾した。
「ああ・・・。」
「何があっても、ちゃんと聞くから。」
　まるで、父を安心させせようとするかのようなその言葉に、ヒュンケルは、感嘆の声を漏らした。
「お前は、強いな。しっかりしている。」
「父さんほどタフじゃないよ。」
「体の問題じゃないさ。」
　ヒュンケルは、口の端を上げて笑みを浮かべた。
「今日はゆっくり休んでいけ。お前の帰りをみんな待っていたんだ。」
「あ・・・うん。」
「今日は母さんが羊のシチューを作ってくれているんだ。」
「え、本当！？いつもの赤いシチュー？」
「ああ。」
「やった！俺、好物なんだよね。」
　幼い頃と変らない笑顔で、息子は喜んだ。
　自分と並び立つほどの精神性を見せつけられ、しかし、昨日のことのように思い起こされる彼が幼かった頃の記憶とを抱えながら、ヒュンケルは、我が子の成長を感じていた。

長女（15）の葛藤
　少女は、鏡を眺めながら、短く切ったばかりの髪に櫛を入れていた。

ロングは手入れが大変だが、ショートも寝癖がつきやすいうえ、まめなカットが必要だ。
　混じりけのない銀の髪を整えながら、だが彼女は、複雑な気分を禁じえなかった。
—・・・短くすると、ますます父さんみたい。
　少女は、幼いころから、父によく似ていると言われていた。
　兄も、父に似ていると言われたことがあったが、兄の髪は母譲りの桃色であったため、本当に父のことをよく知ってる人しか、兄のことはそう評さなかった。
　だが、彼女はどうか。
　顔立ちだけではなく、髪も父譲りの銀色。
　色の白い肌。
　女性にしては切れ長の目は、大きく、はっきりとしており、長い睫毛に覆われていた。
　意志の強そうな眉。
　女性として、非の打ちどころのない造形であったが、そのどれもが、彼女を見る人に、彼女の父を思い起こさせるものだった。
　ヒュンケルを、そのまま女にしたみたいだ。
　何度そう言われたかわからない。
　彼女は、鏡に映る自分を見つめながら、複雑な思いを禁じえなかった。
　父と似ていると言われないようにするために、しばらくの間、髪を伸ばしていた。
　祖母レイラ譲りの髪質は、彼女の銀の髪を滑らかに伸ばし、風にたなびく美しさを見せた。
　だが、村のくらしの中では、長い髪は邪魔になる。
　それで、つい先日、また髪を切ったのだが、そうすると、成長した分だけ、余計に父に似ているのが自分でもよくわかってしまった。
　鏡に映る自分を見つめながら、彼女はため息を吐いた。
　父が嫌いなわけじゃない。
　だが、あまりにも、自分の中に父を見ている人が多すぎる。
—ヒュンケルは、美人だけど、男だからな。女だったら、どんだけ

いい女だったかと思うよ。
　そんな言葉を聞いてしまうと、余計に気持ち悪くなる。
　堂々巡りの思考は、母の言葉で打ち切られた。
「髪直った？」
「あ、うん。」
　マァムは、娘に近付くと、後ろから彼女の髪を撫でた。
「まだちょっと、ここが跳ねてるかな。」
　そう言いながら、娘から受け取った櫛を手に、少女の髪を整える。少しすると、マァムは満足げに娘に告げた。
「さ、これでいいわ。」
「母さん、ありがとう。」
「竈で使う薪を取ってきてくれる？外に置いてあるから。」
「うん。」
　少女は頷くと、立ち上がった。裏口から外に出ていく。娘の後姿をマァムはリビングから見送った。
　村の野良仕事もやりやすいように、少女は、簡素なズボンとシャツを身に着けているだけだったが、それでもなお、彼女の顔立ちや髪の美しさは、いささかも損なわれていなかった。

　少女は、自宅の裏庭に出ると、母屋のすぐ脇にある倉庫の軒下に行き、そこに積まれた薪を抱え始めた。
　村のくらしでは、竈や暖炉に薪は欠かせない。十分に乾燥させた薪をいくつも積み重ね、いつでも使えるようにしていたが、薪はそれなりに重いので、これを運ぶのは重労働だった。
　だが、彼女は、少女の外見に似つかわしくなく、何本も束ねた重い薪を軽々と持ち上げた。腕力は、両親譲りである。
　彼女は、薪の束を抱えると、顔を上に上げた。
　空に昇って間もない朝の光が降りそそぎ、心地が良い。今日もいい天気になりそうだ。
　そう思ったときに、彼女の視界の隅を、銀の光がかすめた。きらりと輝く。
　彼女が不思議に思う間もなく、無神経な大声が彼女の背後から響いてきた。

「よおっ、ヒュンケル！
　手合わせしようぜ！」
　聞き覚えのあるその声は、明らかに、彼女を父と取り違えていた。だが全く気付いていないのか、声の主は一方的に話しかけてきた。
「この前は途中で終わっちまったからな！今日はとことんやろうぜ！
　俺のオーラナックル、受けてみろよ！」
　少女は怒りと苛立ちに肩を震わせた。しばらく無視をしていたが、声の主は構わず話続けた。
　たまらず、彼女は、抱えていた薪の束を、足元に置いた。その彼女の背に、無遠慮な声が投げつけられた。
「おい、ヒュンケル！返事くらいしろよ。」
「・・・誰が父さんよ！男と女の区別もつかないのか、ヒム！！」
　少女は、振り向きざまに拳を引いた。そして、目の前に立つオリハルコンの大男に向かって、正確な一撃を繰りだした。ぱぁんと、小気味よい音が響く。
　ヒムは慌てて両手を前に出してガードをし、後ろに下がった。そしてようやく、自分が人違いをしていたことに気付いた。
「おおおおおっ、と、嬢ちゃんか。」
「見ればわかるでしょう！」
「後ろ姿じゃわかんねえよ。そんな服だしよ。」
「分からないのはあんたくらいよ！」
　すると、ヒムの脇腹にぴしりとひびが入った。
「おおっ！？」
　ヒムが驚きの声を上げる。先ほどの少女の一撃が、ヒムのボディに届いていたのだ。
　少女は得意げに声を上げた。
「どう？母さん直伝の武神流。」
「って、お前、俺はオリハルコンだぞ！？めっちゃくちゃな奴だなあ。ヒュンケルじゃねえんだから、簡単にヒビなんて入れるなよ。」
「いちいち父さんを引き合いに出さないでよ！」

ふたりの怒鳴り合う声に気付き、裏口から、この家の家主やら家族やらが顔を出した。見知った顔に気付き、ヒムが嬉し気に声を上げた。
「よおっ、今度こそヒュンケルだな！」
「ヒム。来てたのか。」
「今着いたところだぜ。嬢ちゃんをお前と間違えちまって、怒られてんだよ。嬢ちゃん、強くなったな。」
　ヒムの物言いにヒュンケルは苦笑した。いったい、どうしたら父と娘を間違えるのだ。
　彼の脇から顔を出したマァムも、事態を察し、驚いた顔をしていた。
　ヒュンケルは、ヒムに呼びかけた。
「そうだな。
　気を付けろよ、ヒム。今の俺よりは娘の方が強いかもしれんぞ。」
　単純に考えれば、４０代のヒュンケルよりも、１５歳の長女の方が勢いがあるのは当然だ。ましてや、ヒュンケルは先の大戦で体を壊している。
　ヒュンケルの言葉に、ヒムは喜色を浮かべた。
「えっ、そうなのか！？
　嬢ちゃん、俺と手合わせしようぜ！」
「・・・ヒムの頭の中って、それしかないの？」
　少女は呆れたように呟いた。ヒムは、父と娘を間違えて声を掛けたことを悪いと思っているのか、少女に詫び、弁明をした。
「さっきは悪かったって。嬢ちゃん、髪長かったじゃねえか。髪切ったの、俺も知らなかったからよ。」
　それは確かにそうだったし、少女が性別を問わない服装をしていたのも事実ではあった。
　ヒムは、呟いた。
「でも残念だな。嬢ちゃん、髪長えときは、きらきらしてて綺麗だったのにな。」
「えっ・・・。」
　突然の誉め言葉に少女は戸惑った。

だが、続く言葉に、少女は再度、幻滅せざるを得なかった。
　ヒムは自分の長い銀髪を揺らしながら、言葉を続けた。
「俺みてえに、さらさらだったよな。
　俺が言うのもなんだけど、ま、手合わせには邪魔だよな。」
「・・・やっぱり、あんたの頭の中って、それしかないのね。」
　少女は、大きくため息を吐いた。
　掛け合いをつづける娘とヒムに、ヒュンケルが声を掛けた。
「せっかくだ、ゆっくりしていけ、ヒム。デルムリン島の近況も聞きたい。クロコダインやブラス老は元気か？」
「おう、元気も元気！変わんねえよ。いくらでも教えてやるぜ！」
　威勢のいい明るい声が、ヒュンケル一家の裏庭に響いた。

次男の役割（10）
「ちいにい、まって〜。」
　少年は、妹の呼び声に振り返ると、足を止めた。５歳下の小さい妹が、彼に駆け寄ってきた。まだ柔らかい彼女の花の色の髪が、ふわりと風に揺れ、綿毛のように見えていた。
「しょうがないなあ。ほら、おいで。」
　少年が手を伸ばすと、妹は嬉しそうに頬を紅潮させ、兄の手を取った。つないだ妹の手は柔らかく、温かかった。
　少年は、左手に籠を持ち、右手で妹の手を引きながら、村の中の道とも言えない道を歩いていた。
　森に囲まれたネイル村は、住人の数も限られており、人口密度は低かった。彼らの父祖が森を切り開いた平らな場所に設けられた村では、ぽつりぽつりと家屋敷や、村の施設が点在し、その間に何となく道らしいものができていたが、都市部のように、石畳で舗装されているわけでもなく、踏み固められてできた土の道にすぎなかった。
　だが、子どもにとってはむしろ歩きやすい。
　通い慣れたその道を、少年は、妹の手を引きながら歩いた。
　少年の銀の髪が歩くたびに揺れていた。
　彼は視線を下げずに、前を向いたまま、妹に語り掛けた。
「おばあちゃん待っているからさ。早く行こうぜ。」

幼い妹は、嬉しそうにうなずいた。
「うん！おばあちゃんちのおやつ、だいすき～。」
　妹の言葉に、少年は苦笑した。
　ふたりは、祖母の家を目指していたが、そもそも、おやつを食べに行くのが目的ではない。
　今朝、母が、たくさんベリージャムを作った。それを祖母におすそ分けするために、母は、少年に、ジャムを詰めた瓶を祖母の家まで届けるように頼んだ。
　そうすると、小さい兄の後を追いかけて妹までついてきてしまったというわけだ。
　きっと、このジャムの瓶を届ければ、祖母は二人を歓迎し、美味しいおやつを出してくれるに違いない。だが、目的はあくまでも、ジャムを祖母に届けるという、お遣いだ。
「おやつを食べに行くんじゃなくて、お遣いだぞ。」
「うん！おやつのおつかい～。」
「違うって。」
　そう言いながら歩いていくと、ほどなくして、祖母の家に着いた。
　少年がドアをノックすると、いつものように、祖母が、優しい笑顔でふたりを出迎えてくれた。
　祖母は、もう５０代になっており、髪にも白いものが混じるようになっていたが、若い頃には、村で一番美しい黒髪の持ち主だと言われていたことは、少年は母から聞いたことがあった。
「いらっしゃい、ふたりとも。」
　ふたりは、祖母の家のリビングに招き入れられた。少年は、すぐに持ってきた籠をテーブルの上に置いた。
「はい、おばあちゃん。母さんから。ベリーのジャム作ったんだ。」
　少年の言葉に、レイラはかごの中を覗き込んだ。藤かごの中には、大きな瓶が２つ入っており、鮮やかな果物の色で満たされていた。
　レイラは瓶を手に取ると、少年に尋ねた。
「まあ、ありがとう。ずいぶんたくさんね。こんなにもらっちゃっ

ていいの？」
　少年は頷いた。
「うん。だって、これだってほんの一部なんだよ。今回はたくさん作ったからさ。」
「そうなの？頑張ったのねえ。二人も一緒に作ったの？」
　祖母の問いに、真っ先に、下の妹が元気よく答えた。
「うん！おてつだいしたのー。」
　すぐに兄がたしなめる。
「お前はベリー洗っただけだろ。
　もう、大変だったよー。父さんと姉さんは畑に行っちゃったから、おれと母さんで大鍋の番しててさ。ふたりでずっとかき回してたんだよ。」
「それはそれは、お疲れさまでした。」
　レイラは、そう言って、孫たちの努力をねぎらった。
「せっかくだから、おやつにしましょうか。このジャムを乗せてクレープ作るわね。」
「ありがとう。」
「やったー！」
　小さい妹が手を叩いて喜ぶと、少年は意地の悪い笑みを浮かべた。
「お前はこれが目当てだったもんな。」
「うん！おばあちゃんのおやつ、だーいすき！」
　毒気のない笑顔を返され、少年はそれ以上何も言えなくなった。
　そんな孫たちの様子を、レイラは微笑ましく思いながら見つめていた。

「はい、どうぞ。」
　レイラは、作り慣れた厚手のクレープに、たっぷりとベリーのジャムを乗せると、孫二人に皿を出した。もちろん、ジャムは、いましがたこのふたりが持ってきたばかりのものだ。
「いただきまーす！」
　ふたりは仲良くそう言うと、祖母手作りのおやつを食べ始めた。
　レイラもお茶を飲み、クレープの端っこをつまみながら、ふたり

の様子を見つめていた。
「ジャム、美味しかったわよ。さっき味見したけど、よくできているわ。」
「そう？おれかき回してただけだから。」
「こげないようにちゃんと見ててくれたんでしょう？ありがとう。おかげで美味しいジャムが頂けたわ。」
「う、うん・・・。」
　少年は、はにかんで、そう答えた。
　すると、妹が口をはさんだ。
「おいしいー。おばあちゃんのおやつ、おいしいね。」
「ありがとう。」
　そう言って、フォークを握りしめながらクレープを食べる妹の口の周りは、ジャムで真っ赤になっていた。少年は、指先で妹の頬にまでついたジャムをすくいながら、妹に指摘した。
「あ、ほら、口の周り、ジャムだらけだぞ。」
「うん？」
「食べ終わったら、口ふけよ。」
「はーい。」
　何かと妹の世話を焼いている少年の姿に、レイラは笑みを浮かべた。
　いつだったか、この家で、こんな光景を見た気がした。
　銀色の髪の少年が、小さな桃色の髪の少女の世話を焼いていた。思い出の中の風景は、今目の前のこのふたりよりもずっと小さく、その動作も言葉もたどたどしかったが、慈しみ合う姿は変わらなかった。
　レイラは微笑みながら、ふたりに語りかけた。
「そうしていると、マァムとヒュンケルの小さい頃みたいね。」
「そうなの？」
「ええ。マァムは小さい頃からヒュンケルのこと大好きだったから、後をついて回ってて、よく面倒を見てもらってたわね。」
　よく考えたら、母はともかく、父はこの村の生まれではないのだから、何故、母方の祖母であるレイラが父の幼い頃を知っているのかと不思議に思うところではあったが、１０歳の少年の頭にはまだ

そこまでの論理性はなかった。
　少年は、少し照れながら、両親の関係性を答えた。
「・・・いまでも仲いいよ。」
「そうね。」
　レイラは頷いた。
　祖母と兄の会話を聞いていたのかいないのか、末の妹が元気に答えた。両親を話題にしていたはずが、いつの間にか、彼女自身の話になっていた。
「うん！ちいにい、だーいすき！ちいにいのおよめさんになる～。」
　少年は、妹の言葉に呆れた声を上げた。
「あのなあ、兄妹はケッコンできないの。」
「そうなの？」
　妹は、きょとんとして、聞き返した。何がいけないのかよくわかっていない顔だった。下の兄がダメなら、上の兄はどうなのだと思ったのか、妹は、少年に尋ねた。
「じゃあ、おおにいは？」
「おおにいもダメ。」
「えーつまんない。」
「当たり前だろ。」
　いつか聞いた、似たような会話を思い出しながら、レイラは、末の孫娘に微笑みかけた。
「ちゃんと見つかるわよ、素敵な人が。楽しみね。」
　祖母にそう言われ、小さな末娘は嬉しそうに微笑んだ。

末娘（５）のせいいっぱい
　わたしには、おとうさんとおかあさんと、おおにいと、ねえねと、ちいにいがいます。
　わたしのおとうさんとおかあさんはなかよしです。
　おとうさんは、まいにち、おかあさんにちゅーってします。
　わたしもまねして、ちいにいにちゅーってすると、ちいにいがおこります。
　おおにいは、おっきいです。

おおにいのかたぐるまが、きもちよくてだいすきです。
　ねえねは、やさしいです。
　ねえねと、おはなつみにいったり、おままごとしたり、あそんでもらいます。
　ねえねに、きのみでおけしょうするの、おしえてもらいました。
　いちばんあそんでくれるのは、ちいにいです。
　ちいにいは、えほんもよんでくれます。
　おやつもわけてくれます。
　ちいにいのことが、だいすきです。
　わたしは、みんなだいすきです。

あの夫婦の子どもたちのこと
長男（１７）
　顔立ちはヒュンケルに似ているが、髪色は桃色。
　性格は明るく、ロカに似ている。
　１６歳で成人して、カール騎士団に入る。
　戦士。
長女（１５）
　顔立ちも髪色もヒュンケルに似ており「ヒュンケルを女にした外見」をしている。
　性格はマァムの方に似ているしっかり者。
　マァムに武神流を教わっている。
　武闘家。
次男（１０）
　外見はヒュンケルに似ている。髪色は銀色。
　上下の兄姉妹と年が離れているので、兄弟という印象が弱く、精神的には一人っ子に近い。
　性格は「喪失体験のない子ヒュン」
次女（５）
　外見はマァムに生き写し。髪は桃色。
　性格は天真爛漫。愛されて育ったちびマァムとよく似ている。